第472号 昭和59年10月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1984年（昭和59年）
10月号（No. 472）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

ネパール・ヒマラヤ
31座の新山名　薬師義美……(1)
創立80周年記念事業への積極的参加と募金ご協力お願い……(1)
カンチ・ベースキャンプを訪ねた折に　橋本龍太郎……(2)
海外の山
ネパールは空前の賑いだが……(4)
国土地理院発行の「地図」の山名について　直原勝一……(5)
ボゴダ山群への誘い……(5)
書評についての一私見　初見一雄……(6)
東西南北……(7)
追悼　吉田久兵衛氏……(8)
図書紹介……(8)
「画文集低山徘徊」「槍・穂高讃歌」「ヒマラヤの高峰」「TREKKING in NEPAL」「山のかおり」
お知らせ……(7)・(10)・(13)
80周年記念事業募金応募者芳名……(11)
図書受入報告　図書委員会……(12)
ネパールの改定山名一覧表他……(13)

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

ネパールヒマラヤ——31座の新山名

薬師義美

ネパール当局は一九八二年十一月末から山名の改訂作業に入っていた。英語などで外国人が命名していたものを、現地名などの、しかるべき名称にしようというものだった。その年暮れに訪ネしたさい、観光省登山課長S・R・シャルマ氏から、山名改訂委員会にオブザーバーとして出席するように求められたが、あいにくと、その会合には出られなかった。

そこで別の日に、委員長を務めるH・B・グルン博士の自宅にシャルマ氏と伺うことになった。博士とは来日の折に会っていたし、学研版の地図の抜き刷りを贈っていたから、初対面ではない。さっそくに改訂試案のリストを示された。そして意見を求められたが、もとより、私がとやかく云う筋のものではなく、もっぱら、新山名の説明を聞いた。ついで、許可峰リストの標高に話題が移っていった。このことは『岩と雪』誌100号（八四年二月）に述べた通りである。

八三年一月四日のこの私的会談のあと、早い時期に発表があるものと思っていた。というのは、委員会設置後、四十五日以内に結論を出すと報道されていたからだ。しかし、八月二十六日に発表されたのは、新しい標高を含む許可峰リストだった。これについては前掲『岩と雪』で論評したが、新山名は非公式としながら、アメリカ山岳会の年報（一九八三年号）にリストが載った。当時、これは私

創立八十周年記念事業への積極的参加と募金ご協力お願い

当会創立八十周年に当る昭和六十年十月がいよいよ一年後に迫りました。趣意書、会報等でご案内の通り、当会は八十周年を迎えるに際し各種記念事業を計画し昭和五十九年、六十年の二カ年にわたり実施することとし、既に本年五月には登山部門のカンチェンジュンガ縦走を成功裡に終え、更にこの十月から、関西支部を初めとして各支部所在地における記念集会等が実施されます。またかねてよりその創設が望まれております山岳特別基金（仮称）の設立も今回事業の主要眼目の一つであります。即ちこの基金は当会における登山に関する実践及び文化活動等を活性化、充実化するための財務的基盤を構築するものであり、八十周年事業といたしましたのは、その第一歩を踏み出す契機としたいためであります。

ご高承の通り周年行事は当会の一祭事ですが、他団体・会社のそれと同様に全会員が参画して実施することが理想的であり、同時に当会の存在を内外に示す絶好の機会ともなるものであります。更にわれわれの会が誇るべきは究極のところ、その有名無名を問わず登山に関連する多彩かつ多様しかも豊富な人間の集団であるということであります。当会の魅力の一つはここにあり周年行事は会員一人一人がお互いにこれを確認し心に刻みこむ重要な祭事であると言ってもよいと考えます。

ひるがえってこれらの諸事業には当然のことながら実施のための資金を必要といたします。当会の財務状況は毎年ご承認を得ております通り一般会計をもってこれを負担する余力はございません。このため従来から特別事業の都度会員各位に格別のご負担につきご協力をお願い申し上げている状況にあります。

今回も例外でなく去る五月に会員各位に対し事業計画の概要をお知らせするとともに所要資金弐千萬円は会員各位からの募金によることとし、応分のご協力をお願い申し上げました。

募金の応募状況は八月末現在（申込期限は七月末）で応募会員数一〇八六名、応募金額一四七〇〇千円でありまして目標に対し未達の結果に終りました。早速ご応募いただいた各位に対しお礼申し上げると同時に、目標に至らなかったことについては執行当事者として深く反省いたしておるも

みんなで八十周年記念事業を成功させよう！

お知らせ電話 234六六五九

が見せられたものとだいぶ違うようだといったけれど、実はほとんど同一であったのだ。

そして、この五月二十六日にネパール観光省が許可峰、未解禁峰を合わせて三十一座の新山名を発表した。アメリカ山岳会年報とまったくいっしょといってよい。発表された原リストは五ページのタイプ印刷、すべてネパール語である。記述内容は旧山名、高度（メートルとフィート）、経緯度、行政区分（ジッラとパンチャヤット名）、新しい山名、命名の根拠、の順となる。

駐ネ日本大使館および松田雄一氏を経てきた原文を、三枝礼子氏に邦訳の労をとってもらったが、紙数の関係で全文をここに掲載できず、別表（一三ページに掲載）のようにまとめてみた。以下に命名の根拠などを加え、順にみてみよう。なお、原文にはミスタイプも含め、明らかな誤りがいくつか見られる。

1～9番はカンチェンジュンガ山群である。1は十字架峰の意、これはかつてタプレジュン地区にあったキラーティ王国の名称。タプレ、シカールはネパール語で頂上の意味。原文の高度六三四一㍍はミスタイプで、六四三一㍍が正しい。ジャヌーは地元の呼称からクンバカルナとする。ピークの形状からの言い習わしというが、インド測量局の新一インチ図には括弧付きで明示されている。ただバルン氷河左岸の、マカルー山群を Khumbakarna Himal といっているので、将来、それとの混合が生じないだろうか。

3はその形から一八九九年にフレッシュフィールドが命名したものだが、タプレジュン地区の女神の名前からパティバラとする。その東一・五キロの前衛峰スフィンクスは、一九三六年のイギリス隊の命名。これをパティバラ・プルバとする。ネパール語でプルバは東という意味で、ずばり、東峰ということになる。

テント・ピークは一九一一年にケラスの命名である。これをキラート・チュリとした。キラートまたはキランティはアルンとタムール川流域に住むライ族とリンブー族の総称で、チュリはネパール語で尖った山頂という意味。原文の高度五六六三㍍はアンナプルナ山群の同名峰の高度で、フィートからの換算、七三六五㍍が正しい。

6、7はともにフレッシュフィールドの命名だが、トゥインズに対して、インド測量局の新地図にギンミゲラが与えられていた。由来や意味はわからないけれど、それをそのまま転用している。ウェッジ・ピークは南麓に流れるラムタン氷河からラムタン・チャン、チャンはこの地方の言葉（チベット語の方言）で北の意味である。

ホワイト・ウエーブは一九三〇年にディーレンフルトの命名。インド測量局の新地図には Annidesha Himal の名称がこの山塊に与えられていることから、アニデシュ・チュリとする。この地方の言葉でアニデシュとは比丘尼たちの住む所をさすという。アウトライアーはケラスの命名、ネ当局はこれをジャナク・チュリとする。ネパール・中国国境条約の地図に記載されている Janak Himal からとったという。原文の高度七〇三五㍍は誤りで、フィートからの換算値七〇四四㍍が正しい。これはグルン博士の近著『ネパールの地図』（バンコク、一九八三年）のデータからも確認できた。

10～14番はクーンブ山群にある。アイランド・ピークは一九五二年のシプトン隊の命名。それを南麓に流れるイムジャ氷河から、イムジャ・ツェと改名した。ツェはシェルパ語で峰、頂上の意味。高度六一八三㍍はミスで、フィートからの換算値六一六〇㍍は八三年の許可峰リストの高度とも一致する。だが、経度に65分というタイプミスがある。

メーラの名称はシュナイダーの地図（一九五七年）にはなく、それ以後に登場した。これはチャムランの近くの Mera Peak と紛らわしかったが、南麓のコンマ・ラのでございます。若干内容にふれますと応募会員数は在籍会員の二七％、応募金額は目標額の七三％であり、更に二口（壱萬円）以上で応募された会員は五三五名（応募会員の四九％）金額一一、九〇一千円（応募金額の八一％）となっております。

今回の目標額弐千萬円の設定に当りましては、事業概要の策定、所要資金の積算等によりますと同時に、募金可能額の目安として、当会が年会費納入率九〇％と他に例をみない高率であることから一口五千円として在籍会員四千名全員の協力を得ることを根拠として組立てたものであります。

このように考えますと金額未達もさることながら応募会員数が在籍会員の四分の一程度にとどまったことは甚だ残念に存じておる次第であります。

従いまして更に多く会員からご協力を得たいと考え、応募申込期限は七月末といたしておりましたがこれを本年十二月末まで延長することといたしました。

最後に周年事業の意義並びに募金の主旨は以上ご説明申し上げた通りであり、是非とも多数会員の参加の下に八十周年記念事業の内容充実とその成功を期したいと存じておりますので、よろしくご理解を賜わり、事業への積極的参加と募金に対するご協力をお願いする次第であります。

なお事務的なことでございますが、募金につきましては一口五千円ですのでご応募に際しては葉書等で八十周年事業、口数金額等をご記載の上お申込いただくかまたは事務局（電話〇三―二六一―四四三三）宛電話による申込等何れの方法でも結構でありますので念のため申し添えます。

以上

創立八十周年記念事業委員会

カンチ・ベースキャンプを訪ねた折に

橋本龍太郎

本年四月、日本山岳会創立八十周年記念事業の一つであるカンチェンジュンガ縦走隊の総指揮という名目で、ネパール入りするチャンスを得た。通常国会の真最中のことでもあり、山には実際のところ三日半しか入れず、欲求不満も残ったが、国会議員としては考えさせられることの多い山行であった。

総指揮の話がとびこんできたとき秘かに「一ヵ月位は休暇をもらい必ずベース入りしよう」と計画を組んだものの昨年暮れの衆議院総選挙で自民党が大幅に議席を減らしたため、国会対策上の配慮から党に「出発から帰国まで十日間」と休暇を値切られてしまったことが第一の誤算、しかも閣僚級の国会議員がネパールに来るのは久しぶりだというので日本大使館の諸君が張り切って、首相や国会議長への表敬訪問を計画、クマール殿下との会談や駐ネパールのインド大使サリーン氏への表敬なども重なって山登りより仕事の方が多くなったのが第二の誤算、同行してくれた三辺マネージャーにも余計な苦労をさせてしまった。

私にとってヒマラヤは二度目。第一回は昭和四十八年、第二次RCCエベレスト南壁登山隊総指揮としてベースキャンプで数日を過ごしている。

現地入りしたあと、十一年前と同様、時間節約の意味もあり、カトマンズからヘリコプターで一気に三千八百メートル地点まで上った。前回はこの高さからエベレストのベースまで、高度の影響なしにスルスルと登った〝実績〟がある。ところが今回はツェラムの中間キャンプをスタートすると間もなく、皆のスピードについて行けなくなってしまった。高所馴化もせず、いきなり三千八百から動きはじめたのだから当然といえば当然だが、「この十一年間、オレも年をとったものだ。」としみじみ実感させられた。

しかし十一年ぶりのヒマラヤは、ネパールの唐辛子のからさを思い出させてくれたし、ヤクのステーキのあじわいをあらためて教えてくれた。山に入っている三日半、アルコールを全然口にしなかったこともあり、シェルパの作ってくれる食事を若い隊員が驚くほどたいらげ、束の間の山男生活を楽しむことができた。

しかし驚いたのは緑が十一年前にくらべ激減していたことである。燃料用として伐採が大きく原因しているとのこと。ネパール政府エネルギー省？の次官に「マキとして燃やすより木炭にすれば燃料としてカロリーアップし、少しでも木を切る量を減らすことができる」と力説したが、どこまで理解してくれたか。ヒマラヤにまでおよんでいる自然破壊は驚きであり、残念なことである。

しかし残念といえばもっと残念だったのは日本の外交と経済援助の実態である。インド大使のサリーンさんを訪問した時、「登山隊のお世話については、私が日本大使館の代りをしています。」と言われた。後刻日本大使にその言葉を伝えたところ、「ああ、サリーンはおせっかいな男で」と一言で片付けてしまったが、ネパール駐在の日本大使が登山隊への関心をまったく持たず、他国の大使の協力を「おせっかい」ときめつける神経には恐るべきものがある。

経済援助を見ても、例えば現在日本が援助してトリプハン大学医学部につくっている附属病院には小児科のベッドがまったくない。乳幼児死亡率の高いネパール医療を一寸でも真剣に考えれば、どんな理由があったにせよ小児科のベッドのない医学部附属病院がいかに親切心の欠けた援助であるかは一目瞭然。帰国後、外務省をはじめ関係方面を怒りまくり、どうやら格好はつくこととなったものの、現地で現場を見せられた時は顔から火のでる思いだった。

カンチの総指揮をさせていただけなかったら私が現地を見る機会もなく、この病院はまさに「仏つくって魂入れず」のことわざ通り、日本のおざなりな援助の実例として批判されたに違いない。

日本山岳会のおかげで日本政府はどうやら恥をかかずに済んだ。心から御礼申し上げるしだいである。

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

の峠名を借用し、コンマ・ツェとした。コンマはこの地方に住む鳥の名前だという。原文の標高六六五四㍍はまったくのミス、フィートからの換算値は五八二〇㍍。ただし、八三年の許可峠リストでは五八四九㍍となっている。

ピーク38はローツェ・シャールから東にのびる尾根上にある。さらにその東方にシャールツェがあり、七四年に西独・オーストリア隊が初登頂して、そう命名した。ネ当局はそれを借用し、シャールツェII峰とした。ピーク43はカンテガとクスム・カングルを結ぶ尾根の中間にある。その西麓にキャシャール谷が流れるところから、そのまま、キャシャールとする。

チャムランの北東にあるピラミッド・ピークはホングー（フンクー）谷とバルン谷の分水嶺上にある。地元のライ語に従って、谷の名称を使ってホンクー・チュリとする。原文の高度六七〇九㍍は誤りで、フィートの換算値六八〇九㍍が正しい。

ロルワーリン山群のピグ・フェラゴは、南面に流れるリクー・コーラを援用して、リクー・チュリとする。16～18番はジュガール山群に属する。最高峰のビック・ホワイト・ピークは一九五五年のイギリス女性隊の用いた仮称だった。日本隊は三度目でこれに初登頂したのは周知の通りだが、八三年の発表で七〇〇〇㍍を切り、がっかりした人が多かったろう。P・アウフシュナイターは一九五九年の地図にレンポ・ガン（Longpo Gang）の名前を与えていた。ガンはカンと同じで、チベット語の雪山。ネ当局はドイツ語ö をoeに置きかえたりしているが、eだけでもよい。日本語の発音ではレンポ・ガンでいいからだ。

レディーズ・ピークも英女性隊の命名だが、近くにグンバ・ギャン村があることから、グンバ・チュリと改名。マディヤ・ピークは六〇年に日本隊が初登頂、命名したもので、マディヤとはサンスクリット語で中央の意味だという。このピークの近くに聖なる池バイラブ・クンド（池）があるため、バイラブ・タクラと改名した。バイラブはシヴァ神の忿怒の相であり、タクラはネパール語で頂上の意味がある。原文の標高六二五六㍍はまったくの誤りで、レディーズ・ピークのものだ。原文のフィートも二〇三〇六㍍ではなく、二二三〇六が正しく、これはグルン博士の前掲書とも一致し、六七九九㍍となって、旧高度とも一致す

る。八三年のネ当局の許可峰リスト発表では混乱があり、経緯度をみても、マディヤ・ピークに対してレディーズ・ピークのデータを発表していたことがここで判明した。

ランタン山群のモリモト・ピークは、一九六四年に大阪市大隊が初登頂。六一年のランタン・リルン遠征中に遭難死した隊長の名前をその無名峰に冠した。今回は近くにある川の名ベムダンと、地元のチベット語方言「リ」（山頂）を用いて改名。原文の経緯度は正しいが、高度六一五〇㍍、二〇一七七㍍はあやしく、二二一七七㍍と六七六〇㍍が正しい気がする。また、ランタン氷河左岸、チベットとの国境稜線上の、従来のPemthang Ri（六八四二㍍）と混乱が生じないだろうか。

ピーク29はいつも話題になってきた。マナスルⅡ峰とか、ダクラとかである。私はマルシャンディ上流でプンゲンというのを聞いたが、今回はンガディ・チュリとする。ヌガディでは決してない。これは南西面から流下して、マルシャンディに合流するンガディ・コーラの名称からきており、上流ではムシ・コーラという。私は現地でンガテと聞いてきた。ちなみにグルン博士はこの流域の村の出身である。

21～27番はアンナプルナ山群である。アンナプルナ・サウスはアンナプルナ・ダクシンと改名。ダクシンとはネパール語で南のこと、別名の象の化身、ヒンズー教でいうガネッシュは採用されなかった。ロック・ノアールは一九五〇年のフランス隊の命名によるもので、仏語で黒い岩、北側から見ると、その通りだが、北麓のカンサール村の名前から、カンサール・カン（雪山）とする。

アンナプルナの内院（サンクチュアリー）は聖地という意味からネパール語でデウタリとする。デウタは神の意味。ここに入域して周囲の山々に名前を与えたのは、一九五六年のJ・ロバーツであった。美しいヒマラヤひだからフリューテッド・ピークとしたものは近くのカルカ（放牧地）の名称からシングー・チュリとなった。また、当初、ロバーツがフィンガー（指）と呼んだものは、のちにファング（牙）といいかえた。形状は文字通り「キバ」である。それをネ当局はヴァラハ・シカールとした。ヴァラハはビシュヌ神の十化身のうちのひとつで猪の姿をする。ピークの形状はその牙のように見え、この地方の有名な神でもあるという。

ガーベルホリンはガンダルヴァ・チュリ。この地方のガイネ（辻音楽士）は有名で、山の形が彼らの使う楽器（サランギ）に似ているといい、ガンダルヴァは天上界の楽士のことである。グレイシャ

海外の山

ネパールは空前の賑いだが

'84ポスト・モンスーンのネパール・ヒマラヤの登山隊は、史上最高の十八ヵ国、六十二隊という賑わいである。

プレよりも、登山活動の効率がいいとする最近の傾向から、この数字となったものと思われる。観光立国を前面に押し出して久しく、そのうえ入山料アップ直後のこの現象は、同国としても一応その目的を達したと見るのも当然であろう。

しかし、ここで問題となるのが、自然環境保護の問題である。同国では、一九八二年十月、第四十四回国際山岳連盟（UIAA）総会が開かれ、「ヒマラヤ環境保護シンポジウム」を持った。ここに至ったのも、欧州アルプス同様、この問題に深い関心を寄せる人々が世界的に多いからである。

ネパールの自然保護問題を分析してみると、国内の問題点としては、狭い国土の開発、森林保護に関する政府の施策と国民の関心度、また国外から考えると、他国の登山者、観光客の汚染問題に分けられる。これは、いずれが先行しなければならないということでも、また誰が行わなければならぬ問題でもないが、国際的な規模で、先進諸国は、発展途上国への援助として、この世界共通の山岳文化財産―大ヒマラヤを守り抜かなければならない義務があると思う。

労山の和田蔵次副会長が、この九月に開かれた自然保護集会で、UIAAの総会参加報告をまとめて発表されているが、ネパールでの人口増加は、発展途上国の平均二・四パーセントを上回わるトップグループの一つに入っており、過去三十年で、人口は二倍の千五百万人だと指摘している。

これら人口増加にともなう森林破壊は年四・三パーセントの消滅で、三〇パーセントを占めていた森林面積は、この三十年で一五パーセントに減少している。パキスタン、アフガニスタン、イランの砂漠化は、二百年前の緑の森林からの大変改であったことを勘案すると、このままの放置は将来、ネパールの沙漠化をもたらすと考えられぬこともない。植林に対するネパール人の関心を、資金的にも、環境的にも助成することは考えられず、またネパール政府の森林の国有化も、ネパール人の性格から、これに拍車をかけていることも事実で、これは植物生態系からもマイナスに働く。

この植林意欲の減衰は、直接、間接に登山隊の汚染にかかわっているともいえる。登山隊への協力というかたちで、安直な日当稼ぎが、地味な自然保護活動をする余裕を与えないだろうし、またエベレストのサウス・コルまでが、登山隊の廃棄物でよごされているというに至っては、各隊の準備段階における対応策検討も、隊のモラルとして当然のことといえる。今秋エベレストには、米国隊が北面から、またニュージーランド隊の西稜経由は、エドモンド・ヒラリー卿の息子ピーターがシェルパレス、オキシジェンレスで試みるほか（ニュージーランド隊はアクシデントで登頂を断念した）、西稜をこなしているチェコが今度は南西壁から、オランダ隊は南東稜から。このような結果、ネパールではエベレストに、山岳パトロール隊まで派遣しているのである。

（片山全平）

ー・ドームは白く大きく見えるため、地元の言葉でタルケ（白い）・カン（雪山）とする。テント・ピークのタルプー・チュリは、山姿がテントに見え、地元の言葉で屋根のことをタルプーということにもとづく。

28～31番はカンジロバ山群にある。28と29はJ・タイスンの命名で、28はこの地方の有名な女神トリプラ・スンダリの名にちなんで命名。ヒウンはネパール語で雪、ヒウンチュリは雪山の一般的な呼称である。29は、その東北東約十八キロにある、有名な僧院シェイ・ゴンパから命名した。

ミルヒベルクは一九五三年にティッヒーが登り、命名したもので、ドイツ語でミルクの山の意味だ。これに対して、南面に流れるジャグドゥラ・コーラの支流パニパルタ・コーラの名称から、パルタ・トゥンバとする。トゥンバは地元の言葉でピークを意味する。高度はインドの新地図で二〇、一〇〇フィートの等高線が読め、六一二六㍍となる。ウェッジ・ピークはその形状から、英語で楔状ピークというわけだが、東麓の谷の名前からプンプン・チュリとなった。

最後に、ダウラギリ山群北東隅の、有名なヒドン・ヴァレイ（隠された谷）は一九五〇年にエルゾーグのフランス隊が発見したものである。今回、これがリカ・サンバと公告された。地元での呼び名とあるが、一九六七年ごろ、アラスカ大学のD・K・ビンガムにもらったスケッチ（スケルトン）・マップにRikha Sampaとしてあった。それはP・アウフシュナイターとアメリカ平和部隊員の踏査資料にもとづくとしてあったが、地元のタカリー語（チベット語の方言）によるものらしく、以来、私はこれをリカ・サンバとして使い、学研の地図にも明記した。チベット語でhiddenにあたるのはsangwaで、それが地方でくずれ、sangba, sampaとなるようだ。私がこれをsambaとしたのは、ヨーロッパのチベット語学者がDelpoとつづるのが、発音はトルボ（Torbo）となり、また、チベットのカンパ族ゲリラがタコーラ地方でカンバと呼ばれていたからだ。リカのリは山、カは地方、土地のことから「山地」という意味だろう。タカリー語で水はキュウ、川はギュンという。

（一九八四年八月）

国土地理院発行の「地図」の山名について

直原勝一

本会報八月号（第四七〇号）の巻頭において、今西錦司名誉会員から山名の採択に関して強い疑念の御言葉があった。

私は国土地理院のOBでもあり、さらに現在地図に関係する仕事に携わっている関係上、本件の疑問を解くべき立場にいる者の一人と自覚し、国土地理院の担当の方に問合せを致しました。

早速次のような回答をいただくことが出来ましたので、ご報告致します。

＊

本誌八月号に掲載された「正しい山名を守るものは誰れなのか」について、貴会員の方より問合せがありましたので、国土地理院の見解を述べさせていただきます。

国土地理院が刊行しているいろ

ボゴダ山群への誘い

八十周年記念登山の計画はカンチェンジュンガ縦走の無事成功で始まり、現在東海支部のガウリサンカール登山を実施中でありますが、掉尾を飾る計画として来夏ボゴダ山群の登山を実施する予定です。

このボゴダに関してはチョモランマ登山のあと中国登山協会の格別なご好意により、若い人達のため五年間の継続登山の許可を取得したもので、ご高承のとおり八一年より鹿野（カンチ縦走隊長）、磯野（中央峰登頂）上原（関西支部）、大野（東海支部）の諸兄率いる隊により連続四年間続いて参りました。

最終年に当る来夏は締めくくりに八十周年記念として全国規模で実施したいと考えています。

本来学生を中心とした若い人達向けのプレイグラウンドとして着目したためなるべく経費を安く、短期間の効率的登山を実践してきました。従って特別許可の硬車（二等）寝台の利用、幕営地域の拡大、登山資材の活用など、一つのユニークな中国登山の一形態を確立しつつあります。

来夏は特に他山群への入域拡大を考えいろいろと中国登山協会と接衝して参りましたが、今のところよい返事がなく、矢張りボゴダ山群が中心になると思います。

各支部長を通じ、また会員の皆様の口コミにより多くの参加者を期待しております。皆様からのご要望を受け具体的な計画を立案してゆくつもりですが、現在は次のような案を持っています。

記

一、期間　一九八五年七月末～九月末の間で(A)十五日(B)三十日(C)四十五日くらいの編成

二、対象　ボゴダ山群および周辺地域

三、費用　約五十万円前後、長期間参加した方が割安になるよう補助金の配分を考えます。

四、参加人員　三十名前後、次の高峰へのステップと考えている人に最適のため、学生、若い社会人の方の参加が望ましいが、周辺の景勝地、遺跡めぐりなど観光も考えられるので健康な方ならご相談に応じます。できれば知合いの二人以上の仲間の集合体であって欲しいと思っていますが、勿論お独りの参加でも結構です。

五、申込　六十年一月末日、お申込のあった方には以後個々にご連絡を致します。（最終は五月末頃になると思います。）

六、担当　JACルーム内　八五年ボゴダ登山係（宮下・村木・磯野・相馬）

以上

これからのJACを考え、よりよき登山を実践するため是非この機会をご利用することをお願い致します。

（宮下秀樹）

いろな地図の中で、登山家にも親しまれている中縮尺地図は、国土の全域をカバーする基本的な地図であり、その中に記載されている内容は、地名を含めて国土に関する基準的な情報としての意義を持っております。

従って国土地理院では、地図上に記載する地名は、実際に現地で使用されており、かつ一般的にも通用するものを採用するという方針のもとに、地元市町村長から証明印を押した地名調書を提出して頂いております。山名その他の自然地名も一般にこの方法にもとづいて、地名調書記載のものを採用し注記しております。しかし、たとえば同一の山であっても、他の市町村にまたがる場合とか、あるいは同一の市町村であっても時期を異にして地名調書が提出された場合、山名が異なる場合があります。このような時には、再度関係市町村に照会して確認をとっております。また、国土地理院と、海図等を作成している海上保安庁水路部との間で設置された「地名等の統一に関する連絡協議会」において、審議を重ねて「標準地名」を決定しており、その結果を「標準地名集」として刊行しております。

五万分一地形図「京都東北部」において、比叡山の尾根つづきにある△六八一㍍の山は、昭和四十二年五月二十四日京都市長および昭和四十年十一月二十九日大津市長より提出された地名調書によれば、いずれも「大尾山（おおびやま）」と記載してあり、また今回国土地理院の出先機関である近畿地方測量部から、地元京都市および大津市に照会した結果「童髯山」という山名は使われたこともないし、聞いたこともなく「大尾山」が正しい呼び名であるとの確認を得ました。なお「京都東北部」の図の初版は大正十一年ですが、その時の図には該当の山名は記載されておりません。当時の地名調書は、大正十一年十月十九日旧伊香立村長より提出されたものであり、山名は記載されておりませんが、昭和二十九年九月一日同村長から提出された地名調書を見ると、横書きで「梶山」と表示されており、見方によっては「木尾山」と読めないこともありませんが、これ以上の判断材料を欠いております。

また、五万分の一地形図「四ツ谷」記載の山名「ソトバ山」「鴨瀬芦谷山」「掛橋谷山」については、昭和四十年四月九日京北町長および昭和四十五年十月五日美山町長より提出の地名調書に明記されており「滝の谷」「シライシ」「カヤン谷」の山名はいろいろ資料を当りましたが確認できません。

地図の記載内容等について、国土地理院に対する問合せは月に約五十件程あります。当院ではその都度、資料調査、現地調査などに

書評についての一私見

初見一雄

他人様の著書を批判する、またはあげつらうことは心なきわざとしみじみ思うことなのですが、近頃の「山」とか「山岳」に出稿された「書評」をよんでみると気にかかることが一つ二つでてまいります。

その一つは、或る型ができ上ってしまっているということです。しかもその型は自らが創りだしたものとはいえず、前からあるものに自身を嵌め込んだもの、つまり既製服に体を合せたものといえるのが多いことです。

テーマの捉え方、文の構成、ポイントのおき方、瑕疵を見つけてもそこを突っつかない、そしてどこで提燈をつけて締め括るかまで、読むほどに横にも縦にも作用する連鎖性、一卵性双生児のような類型が眼につくのです。

末尾の数行前に註文とも苦言とも、どっちつかずの追従といってもいいすぎではないものが文字通り追従しています。

そこで考えるのですが、書評というものは著書に対する価値判断を公けにすることだといえますから、この追従までを前段とし次段から真剣な批判批評をはじめて貰いたいのです。そうでなければ単なる紹介文に終ってしまうし、その程度の内容ならば本に纏いついている帯に印刷されているもので充分まにあってしまうのです。むしろ簡にして要を得た名文を見せつけられる場合だってあるのです。

個性を見失ったもの、そしてはびこりつつある類型、よって来たるもとは模倣性にあると思われます。もの真似、文章真似、これを悪いこととはいいません。文豪といわれている人も先輩の文章をまねたとあかしています。

この模倣性は書評だけではなく、紀行文にもゆき渡っているようです。どの紀行を読んでも似ています。驚くべき程の類似性がみられ、地名、期日、天候、隊員名等の組合わせを適当に変えてゆけば、たちどころに数本の文章を作ることができそうに思います。片や〝ワープロ〟なるものが発達しつつある現今、以上のデータを入力しさえすれば将来は綴方を書く努力は無用となるかもしれません。これを人智の進歩と喜ぶべきか、退歩と悲しむべきかは分かりませんが味気なさに変りありますまい。

登山の発展は無酸素で最高峯までいってしまったようですが、これをみますと、手と足は確かに発達してしまったと思うのです。少し訂正して申すならば脚だけは美事な発達ぶりです。

十七世紀フランスの科学者で、哲学者でもあるB・パスカルは「人間は考える葦—Roseau pansant—だ」といっていますが、おれ達は「考えざる脚なのだ」と力みかえっても彼パスカルを修道院から連れもどすほどの迫力はありますまい。

無思考性と模倣性は表裏一体となって進行中だし、知性の貧困がそれを追いかけていると思われますが心すべきことではありませんか。

—八四・六・二三—

*

書評委員会から

書評のあり方に関し、初見氏より前掲のような建設的なご意見をお寄せいただき、厚くお礼申し上げます。

ご意見に対し、書評委員会の見解を述べる前に書評活動が会員にあまり知られていない向きもあるので、先ずこの機会にその概略をご紹介してお

よる確認を行い、誤りがあれば出来るだけ早く訂正する等の手段を講じております。

国民に対するサービスで月刊紙を発行せよというご要望では、当院の地形図の刊行業務を委託している（財）日本地図センターから「地図ニュース」および（社）地図協会から「地図の友」がいずれも月刊誌として発行されており、それぞれ国土地理院の地図刊行に関する記事（刊行予定を含めて）が掲載されております。また地方での地図展開催や、地図一覧図の頒布、映画やビデオテープの貸し出し等のサービスを行っています。

国土地理院では、地名のみならず、国土に関する正しい情報を、広く国民の皆様にサービスできるよう鋭意努力しておりますので、もしお気づきの点等がありましたら御一報下されば幸いに存じます

（国土地理院地図管理部地図資料課　電話〇二九八―六四―一一一一内線七三六）

訂正　会報470号2ページ第1段、はじめより17行目、おわりから8行目にそれぞれ「竜髯山」とあるのを「童髯山」と改めて下さい。

東・西・南・北

外務省よりのお願い

外務省領事第二課長より運輸省旅行業課長宛送付された書類の写しが、外務省より本会へ送られてきましたので次に掲載します。

＊

最近、シャモニー、ツェルマット等において、山岳事故の多発により多数の犠牲者が出ている事実に鑑み、在ジュネーヴ日本国総領事館では別添のような注意書を作成。現地において一般邦人旅行者へ配布し、登山の安全と環境保護に対する注意を呼びかけている旨報告致すとともに関係方面への注意喚起方依頼致しました。

つきましては、スイス、フランスの山岳地方への旅行者に対し、安全対策につき十分な配慮を行うよう、また、環境保護に努めるよう、日本旅行業協会等を通じ、しかるべく注意喚起方お願いします

（別添）

登山者・旅行者の皆様へ

次の点に十分注意の上、登山・観光を楽しみましょう。

一、安全の心得

(1)登山届及び登山者カードの提出を励行しましょう。

提出先

シャモニー　スネルスポーツ店　104 rue paccard

ツェルマット　ベガ書店（郵便局前）

(2)事前に準備を十分行い、地元登山関係者等に天気予報を確かめ、無理な行動は絶対に避けましょう。

(3)単独行動は慎み、必要に応じ専門のガイドの案内により登山するようにしましょう。

二、環境保護の心得

(1)環境の保護に気をつけましょう。（リンドウ、エーデルワイス、アルペンローズ、シャクナゲ等高山植物の採集は禁止されています。）

(2)落書は慎みましょう。（落書帳がエギーユ・デュ・ミディ及びブレバンの頂上駅に備え付けてあります。）

三、緊急時の連絡先

シャモニー

シャモニー友の会

神田（スネルスポーツ店）

(50) 53 02 17

斉藤（マックカズ）

(50) 53 43 03

ツェルマット

西永（ベガ書店）

(028) 67 21 66

ジュネーヴ

日本国総領事館

(022) 21 46―88

在ジュネーヴ日本国総領事館

シャモニー友の会

ツェルマット在住邦人

会員懇談会のお知らせ

講演と映画

十一月十五日（木）午後六時三十分より、ルームにて

講師　重広恒夫氏（K2、エベレスト登頂者）

「伯耆大山からエベレスト」

映画（16ミリ）

「ラトックI峰の記録」

総務・学生部共催

書評委員会は、会員に積極的に且つ適確に図書紹介を行うことを目的に、昭和四十六年十二月、独立の委員会として設けられたものです（「会報」第三一九号、第三二〇号会務報告参照）。

本会の図書室は、その受入れ図書の殆んどが、出版社や著者および会員からの寄贈本によって拡充運営されていることはご承知のとおりです。

書評委員会は、これらの受入れ図書を主体に、出来るだけ客観的な立場に立って、内外の山岳文献を広く会員に紹介し、参考に供するよう活動しております。勿論これには、寄贈者に対する反対給付的な意味も含んでいるわけです。

書評委員会は、三～四ケ月ごとに委員会を開催し、紹介すべき図書と、その紹介者を決定し、原稿の執筆を依頼しております。紹介者には書評委員のみならず、山岳文献に精通されている会員、また図書によっては、支部の協力を得て地方の会員にもすすんで依頼するようにしております。

さて前掲初見氏の書評に対するご意見は、二つに要約できるかと思います。第一点は書評が類型化しているというご指摘、第二点は書評にもっときたいと存じます。

書評委員会は、会員に積極的に且つ適確に図書紹介を行うことを目的に、昭和四十六年十二月、独立の委員会として設けられたものです（「会報」第三一九号、第三二〇号会務報告参照）。

本会の図書室は、その受入れ図書の殆んどが、出版社や著者および会員からの寄贈本によって拡充運営されていることはご承知のとおりです。

書評委員会は、これらの受入れ図書を主体に、出来るだけ客観的な立場に立って、内外の山岳文献を広く会員に紹介し、参考に供するよう活動しております。勿論これには、寄贈者に対する反対給付的な意味も含んでいるわけです。

書評委員会は、三～四ケ月ごとに委員会を開催し、紹介すべき図書と、その紹介者を決定し、原稿の執筆を依頼しております。紹介者には書評委員のみならず、山岳文献に精通されている会員、また図書によっては、支部の協力を得て地方の会員にもすすんで依頼するようにしております。

さて前掲初見氏の書評に対するご意見は、二つに要約できるかと思います。第一点は書評が類型化しているというご指摘、第二点は書評にもっと批評、批判の精神を導入べきではないかというご提案です。

第一点は前述のとおり書評が図書紹介を主目的としており、しかも限られた紙面のなかでの一定項目の紹介、つまり紹介文の形式をとっていることから、それが結果的に類型化の感を与えるのも、ある程度避けられないことかと存じます。

第二点は大変貴重なご提案であると受けとめております。しかし、現在の図書室の運営形態からいって、図書の寄贈を受けた主体（JAC）が、その機関の出版物で、積極的に寄贈図書の価値判断を下すことはどんなものでしょうか。図書紹介ではその点はむしろ従とし、読者自身の評価に委ねるべき性質のものではないかと考えております。勿論、図書によっては批評批判し、注文をつける場合もあることはご存じのとおりです。

書評委員会では今回の初見氏の貴重なご指摘やご提案を参考にしながら、多くの会員に親しまれる新鮮な内容の図書紹介になるよう努力したいと考えております。

皆様のご協力をお願いする次第です。

（担当理事・松家　晋）

俳句

'83年後半期山行句

柿原　謙一

山雨急穂高の襞に滝生る
秩父より奥多摩越えや草の花
夕紅葉燃え山小屋をあかるうす
牧閉し牧夫もみえぬ国境
牧舎には牛腹ばひて年忘
着ぶくれて峡の鉱泉守るばかり
孫去りし山の湯守りて年惜しむ

氷河光

〜スイスよりチロルへ〜

小林　碧郎

山羊の群鈴鳴らしゆき明易し
郭公や牧童の荷の大チーズ
松虫草露に大鎌舁き出づる
雲海や幾牧のぼる単線路
氷河光あまねし秣刈りすすむ
日盛りや寂と氷河の合流す
氷河圏かがやき来しは岳鴉
モンテローザ鎧ふ氷河に雷火立つ
北壁のクルス真夏の雪を出づ
堆く氷河尽きたり夏あざみ
アイガーの雪崩るると星流れけり
雪線に舞ふ夏蝶の翅おもし
アルプホルン雲に響かせ夏惜しむ
ツイター弾く葡萄祭の牧夫たち
聖母祭チロルの奥の秋はやし

図書委員会懇親会

図書委員会恒例の懇親会が、七月七、八の両日、新緑に萌える谷川岳麓の土合山の家で行われた。梅雨時とあって、生憎の雨となったが、七日夕刻、総勢十三名が山の家に集合。かつては上越線土合駅の信号所としてスタートしたという土合山の家も、登山やスキーの隆盛と相俟って、立派な旅館に変貌した。これも、登山者やスキーヤーの山の宿に対する気質や要求の変遷を反映した結果であろう。

アルコール抜きでは始まらない図書委員会のこと、例によって、差し入れのアルコールが、中国の老酒（河野委員）からスコットランドのウイスキー（山崎、河村、越田、武田各委員）、コニャックのブランデー（大森委員）、果ては日本の焼酎（伊藤委員）まで世界各国の銘酒が、次々とテーブルの上に並べられた。

今回、会場に山の家が選ばれたのは、主人の中島喜代志氏から谷川岳にまつわる昔話を伺うためであったが、生憎中島氏は所用とのことで出席されず、代って山崎委員長から上越線が開通した昭和初年代の谷川岳周辺の歴史四方山話を伺った。

アルコールも大分回って、つもる話は、尽きなかった。戸外の雨

追悼

永年会員　吉田久兵衛氏

（会員番号八二六）

永年会員吉田久兵衛氏が九月七日、文京区本郷の自宅で心不全のため亡くなられた。告別式は九月九日午後一時から文京区千駄木の道灌山会館で行われ、本会から生花をそなえ、山田二郎、鶴岡元之助、松本熊次郎、小川益男、山崎安治の各氏が参列した。

氏は明治三十四年八月浅草に生まれ、大正十一年十二月、本会入会、会員番号八二六番、大倉商業在学中より木曽御岳、白馬岳、槍ケ岳、剣、小黒部などに足跡を残し、また霧の旅会のメンバーとして大正十五年七月、松本善二、野口末延両氏と蓬峠から谷川連峰を経て三国峠までの初縦走を記録し谷川岳の登山史を飾っている。（この記録は『霧の旅』第七年二十一号「会員通信」、および『山岳』第二十五年三号、松本善二「上越境の山とその地名」に出ている）。

貞享年間（一六八〇年代）創業の古書店文淵閣浅倉屋十一代目の当主、古文書の権威で、国立国会図書館図書評価委員を務められ、山の古地図なども多く集められていた。本会の図書委員会にも相談役としていろいろお力ぞえをいただいており、ご逝去が惜しまれてならない。昭和四十七年十二月の年次晩餐会の席上永年会員になられた。「博峰院釈融久居士」に合掌する。

（山崎安治）

新刊の山本紹介

画文集　低山徘徊

小林泰彦著

本書は月刊『山と渓谷』に「低山徘徊」と「低山発掘」のタイトルで連載されたもので、今なお「低山再会」の名のもとで掲載が続いてもいる。筆者は東京生れのイラストレーター。「アウトドア・ライフ入門」など幾冊かの著書もある。名の如く画文集で、著者独特の緑を基調にした明るいイラスト、下段に軽妙な文章が綴られている。全四十二編中、巻頭は「ヤスヒコ流」低山歩きのすすめであるから、コースの紹介としては四十一である。

ヤスヒコ流低山歩きは読んでいて楽しい。また見ていて楽しい絵本。ほのぼのとしてほほ笑ましい。いつしか筆者の口調にさえなってしまうのだ。

朝日新聞日曜版に「原田泰治の世界」があるが、さしずめその低山版を彷彿させる。全編ヤスヒコ流のメルヘンの世界である。

彼は「低山歩きはリラックスが生命だ」と力説する。そしてそのシーズンは秋から冬、更に早春だという。しかしこの中には明らかに夏の低山もあるが、それは月刊誌掲載の宿命で、それが筆者の苦労したところであろう。

「目の下は仙石原ゴルフ場と別荘群。こうした人工のものはあまり見ていない方がよい」自然を愛する筆者の心情がでている。また彼は画・文のほかに鳥（バードウオッチャー）と釣が好きなようだ。低山徘徊の小道具として「時々ザ

脚は依然激しかったが、明日はできれば白毛門に登りたいということもあって、酒盛りも残念ながら中断して床に就いた。

翌八日は、雨は上らなかったが、降りしきる雨の中、谷川岳東面の沢めぐりをすることにした。土合橋を渡って遭難慰霊碑にお参りしてから国道を登る。道はすっかり舗装され、雨とはいえ、沢見物やスキーヤーの車が盛んに行交うのは、いささか興醒めであるがそれでも、清水峠が栄えたころ築かれたという道端の石垣が、雨にしっとりと苔むして、足の疲れをいやしてくれた。マチガ沢はまだ残雪も豊富で多勢のスキーヤーが押しかけていた。一ノ倉沢もすっかりガスに閉ざされて、岩壁を遠望することはできなかったが、沢の出合に、一輪、シラネアオイが紫色の、文字通り花を添えていた。

幽ノ沢を覗いてから、新道の成蹊大虹芝寮へ下る。隣の鉄道小屋の軒下を借りて、酒盛りの二次会兼中食とした。雨は小降りになったかと思うと、また激しくなるといった調子で止む気配はない。狭い軒下に十三名肩寄せ合っての雨宿りは、十分なスキンシップが図れた。

篠突く雨の中、お神酒も十分に回って、快適に新道を土合へ向った。雪融け水に雨が重なって、どの沢も大量の流水であった。木橋もすっかり水の中で、デブリで押し倒された直径五十㌢もある大木を橋代りに、木登りを余儀なくされた。

それにしても、沢山の大木がナギ倒されており、今冬の豪雪と、雪のすさまじい破壊力、おそろしさを、まざまざと見せつけられた。

山々は雨にけぶって、残念ながら仰ぐことはできなかったが、楽しい散策であった。

谷川岳の中も上越線、新幹線と次々に開通し、今また高速道路のトンネル工事が行われている。谷川岳の中は穴だらけである。鉄道や道路の開通によって、上越の山々へ行くのは便利になるのはありがたいけれども、美しい自然を破壊しないようにと願いつつ車中の人となった。

参加者 山崎安治、河村栄二、大橋 晋、松家 晋、大森久雄、近藤緑、越田和男、平井吉夫、平井氏令息、河野悠二、泉 久恵、神戸恵子、伊藤博夫

（伊藤博夫）

日高神威岳

—前支部長 大塚 武 追悼慰霊山行—

北海道支部

昨年八月二十九日、日高神威岳（一、六〇〇・五㍍）で遭難死した大塚武前支部長の追悼慰霊山行が、八月十日から二泊三日の日程

ックの中にバックロードを用意する」のである。

舞台は関東周辺が多いが、後編にいたって意識して北は下北、南は四国、淡路などにも遠出を試みている。自然遊歩道、自然公園などの探訪も多い。そしてテリトリーも「歩くといっても何も山に限らなくてもいいじゃないか」と川、湖、海、平地（忍野村）と拡げてもいる。

全編にわたってカタカナがものすごく出てくるが、それでいて気にならないのはその使い方が実にうまく、タイミングがよいからで文章に軽妙さを与えているようだ。

ガイドとしては五万分の一の地図名と入・下山の交通があるだけ。「低山歩きのガイドは宿命として存在しないことになる」けれども見て読んでいるうちにいつしか行ってみたくなるから、個性的低山歩きのヒントとしてガイドの役も立派に果しているのではなかろうか。ただこの中に、弁当ポイントや弁当タイムは結構でてくるが、低山歩きならば当然、酒の楽しみ昼餉の宴、友との語らいなどの盛大な楽しみ方があっても然るべきだが、それがないのがややもの足りない。

そして山男たちに「どうです。岩にばっかりへばりついていないで、たまにはこんなところにもやっておいで」と呼びかける。徹底的に「低山弁護人」をもって任じているのである。

今回は私事になるので恐縮ですが（もっとも記事はすべて私事なのだけど）とこの筆者もことわっているところが微笑ましいが、私も私事として、本書の四十一コースの中三十コースを歩いているから相当なヤスヒコ流低山歩きの優等生として褒めて貰わなければならないと思う。

一九八四年二月一日発行 一七六ページ 山と渓谷社刊 B5変型判 定価二九〇〇円

（小倉 厚）

槍・穂高讃歌

山本和雄著

北アルプスの中でも、槍・穂高周辺を集中的に撮りつづけている山本和雄さんが〝全力投球〟してうたいあげた「槍・穂高讃歌」はどっしりした作品集。縦二九、横二一㌢のA四判。

山本さん（一九二八年生まれ、京都府在住）は「少年時代から山にあこがれ、北アルプスを中心に日本の山々を歩きつづけ、写真も同じころから趣味として撮っていた。長い教職時代を終え、退職後の一九六六年ごろから写真を志して山の風景写真を撮りはじめ、現在に至っている」と、ご本人が奥付に書いている。七四年に作品集「穂高」、七九年に写真集「素顔の山」、八一年に写真集「四季上高地」を出している。いずれも山と渓谷社から。

四冊目のこんどの作品集は、上高地から涸沢、穂高連峰、そして槍ヶ岳へつづく北アルプスの代表ルートの移りゆく四季を百三十四点のカラー写真で見せている。作品は穂高周辺が五十六点で一番多く、次が大正池・上高地の二十二点。

撮影する位置は特別に難しいところを避け、誰もが立てる登山道や河原から、普通に見られる情景をごく自然に撮っているので、われわれに親しみ深い作品が多い。なかでも雲を有効に使っている作品や、影の暗さに明るい部分をうまく対比させ、日の当たっている尾根筋や樹木をことさら強調した描写などは生きている。

この本は写真集であると同時に山岳写真の技術書としても活用できるように工夫されていて、著者と編集者の気くばりの跡がうかがえる。作品を見せたあとの一二ページにわたる「撮影解説」では、全作品を黒白で小さく出し、その横に写真の撮影意図や技術上の問題点、あるいは撮影上のアドバイスを十九字詰め六行でまとめている。その下の撮影データは、ほとんど三五㍉判カメラを使っている一般登山者のため、使っている4×5判（九・五×一二㌢）カメラの撮影データ（レンズの焦点距離

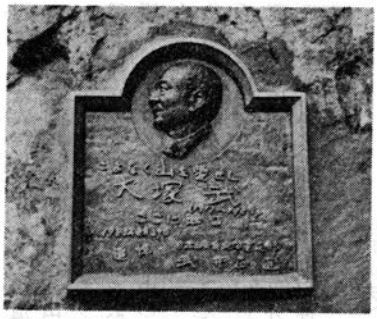
で行われた。参加者は、東京から御遺族の大塚謙一氏、小倉明子さんを含め、橋本支部長以下二十三名。

第一日目は、上二股（五二四㍍）にテントを設営し、橋本支部長の背負った重さ七キロのレリーフを仮安置、読経焼香。夕食は、うなぎ蒲焼。夜空に星が、一つ二つと輝き出す頃、北海道支部合唱団のコーラスが始まる。ニシュオマナイ沢の谷の細流にハーモニイして、歌声は、夜半まで続いた。

第二日は、午前五時、朝食もそこそこに出発。七・二〇、二股から直登する頃より時折日が指す。十一時頂上へ。川越、大塚、新妻三浦、久保田の五名は、大塚前支部長の遺体が見つかった神威岳北斜面中ノ川源頭（八八〇㍍）へ下降、冥福を祈る。午後四時、上二股の岩に嵌め込まれたレリーフの除幕式。大塚謙一氏、小倉明子さん橋本誠二支部長により山岳会旗の紐が引かれる。参加者一同で焼香、生花を手向ける。

レリーフには「こよなく山を愛せし大塚武ここに眠る」と刻まれている。

第三日、小屋の前で広島大学の豊島氏に再会する。昨年捜索の際の遺留品の発見者である。予定通り浦河町萩伏で午前十一時解散となる。この山行で、捜索時より尽力された川越、三浦両氏、レリーフ工事に従事された井後氏、アマチュア無線クラブJH8YHM、JR8UMXと参加された支部会員の皆さんに深甚の謝意を表する。



参加者　井後幸太郎、先川信一郎、沢尻利弘、今井三男、赤石喜恵子、川越昭夫、河村皆子、横田春雄、久保田優一、野口礼子、沢田長子、牧野昭蔵、水科行雄、新妻徹、橋本誠二、亀井秀子、柳田涼子、浅利欣吉、平野明、大塚謙一、小倉明子、山元肇、三浦勝幸

（平野　明〈JA8AOJ〉）

お知らせ

自然保護全国集会は十二月一～二日に東京で

●自然保護活動報告・討論会

など）を三五㍉判カメラに換算して出している。

また最後の「季節別撮影モデル・プラン（三ページ、三千六百字）は、著者の経験をもとに、それぞれの季節の特徴と状況を記したもの。ここにあげた具体的な季節別のモチーフは撮影ポイントの手引きにもなる。それに撮影場所に作品番号をいれた案内地図がついている。私も山の本の編集を経験したことがあるが、この地図をつくるだけでも手間がかかるものだ。

いずれにしても、この山域を三十余年にわたり撮りつづけた著者が、自信をもって手の内のすべてを見せてくれたような作品集である。

一九八三年七月一日　山と渓谷社発行　二八〇ページ　定価三八〇〇円　（広羽　清）

ヒマラヤの高峰　全五巻

深田久弥著

望月・諏訪多・雁部・池田　編集

一九七三年に出た決定版『ヒマラヤの高峰』全三巻の抄録普及版。元版刊行中に同一の出版社から普及版が出ることは山の本としては前例が少ない。本書の需要が高いことの証左とも云えよう。

内容については、月刊誌『岳人』や白水社決定版等を通して多くの会員には周知のことと思われるので紙幅の関係上割愛する。

元版一三七座から七五座への抄録となる普及版は、元版における著者執筆順による編年式の配列を改め、ヒマラヤを五つの地域に分割し各巻をそれぞれに充てている（第一巻　シッキム、東部ネパール。第二巻　中・西部ネパール、インド。第三巻　東部カラコルム、カシミール。第四巻　西部カラコルム、ヒンドゥ・クシュ。第五巻中国、パミール）。各巻一四座から一六座が収められ、全五巻で八千米峰一四座（『岳人』の連載には執筆されていないローツェ、チョー・オユー、ガッシャーブルムⅡ峰の三座も『ヒマラヤ登攀史』第二版〈岩波新書〉から採録されている）を含む七五座が収められている。

七五座の選択にあたり編者は、「現在登山の対象として興味をもたれている山、ヒマラヤ史上重要な意味をもつ山」を選び、「ストーリーテラーとしての深田さんの面目が躍如としている山座は標高にこだわらず収録」したという。

また、従来の山姿図をすべて写真に差換え、ルート図を記入したことも普及版の特徴として挙げられている。

しかし、最大の特徴は、元版刊行後も隆盛を極めているヒマラヤ登山のその後について、一九八二年ポストモンスーンまでの主要な記録を「編者補遺」として新たに補足したことにある。補遺に際しての姿勢として「単にどの隊がいつ登頂したかだけでなく、採用したルートや登攀スタイルについてもなるべく触れておいた。登山の結果以上に、その内容を重視するのはヒマラヤに限らず現代登山の最も顕著な傾向なのである」とあとがきに記されており、限られたスペースではあるが、貴重なクロニクルとなっている。

普及版としての制約から、参考文献、概念図の一部、人名・地名索引の省略や、各座の導入として書かれた、所謂まくらの部分が、配列の変更と山座の限定により、年代順に連続して読めないこと等に一抹の寂しさが残る。（それ等を望む読者は、収録されなかった六五座を含め、併行して刊行されている元版を繙くこととなろう）

ともあれ『ヒマラヤの高峰』がこの普及版により、より広い層の人々に読まれる機会が与えられたことを慶びたい。

一九八三年三月～八月　白水社発行　四六判　各巻平均二七一ページ　定価各巻一七〇〇円

（滝川　清）

TREKKING in NEPAL

中野　融著

山と渓谷社発売のこの本は中野融氏とそのグループの美しい写真集と言うべきで、ただのガイドブ

十二月一日（土）午後一時～四時
主婦会館会議室（四ツ谷駅東口）

●自然観察会
十二月二日（日）午前十時～十二時
国立科学博物館附属自然教育園（目黒）見学と説明。
会費 東京青年文化会館（代々木）一泊の宿泊費込み八千円。
申し込み 日本山岳会自然保護委員会までハガキで（〆切り十一月十日）。詳細案内を送ります。

大会中は自然保護委員がお世話いたします。地方在住会員の年次晩餐会（会費は別）出席を兼ねて多数参加を歓迎いたします。

自然保護委員会

図書交換会

日時 十月二十七日（土）午後二時
場所 本会集会室
多数の方の参加を期待します。特に初めての方は大歓迎致します。

図書委員会

昭和59年・年次晩餐会ご案内

日時 十二月一日（土）午後六時開宴（簡易バー午後四時三十分開店）
場所 ホテル・ニューオータニ 芙蓉の間
会費 一万円
詳細は事務局まで

八十周年記念事業募金応募者ご芳名（昭和五十九年八月三十一日まで、敬称略、順不同）

（二〇口）伊達篤郎　吉田宏（東京）（追加一〇口）（一〇口）山県　浩　（六口）平林克敏　山本良三　蒲生明登　松井辰弥　（五口）増江俊三　（三口）中島伊平　住吉仙也　海野治良　（二口）三浦勝幸　鈴木　茂　杉野目　浩　奥野幸道　前田清子　伊藤紀克　新井信太郎　大森久雄　仲西政一郎　平林芳夫　近藤克二　阿部鉄男　加藤達男　坂井八郎　河上鐐治　勝田房治　広瀬貞雄　浅原健雄　前田中庸　高本信子　松方峰蔵　佐々木豊喜　門田　茂　井口正男　一原有徳　阿部和行　（一口）河村章人　横田茂雄　直原勝一　近藤　薫　大久保勝己　栗原昭作　神原　達　樋渡順一　宮原弘之　杉山イタル　近藤真幹　田中昭男　五十嵐篤雄　水沢富一郎　久保田優一　佐々木喜一　草野洋一　水上　巌　青柳かおる　国見利夫　小島守夫　武田　敏　細井澄子　鈴木　宏　福永次男　川本章光　綿引安人　松本恒広　油谷次康　塩田輔雄　砂田定夫　堀口丈夫　三谷孝一　玉名金助　松本莞爾　田島祐一　瀧島　清　野崎茂人　岸田幸雄　金子誠一　平井泰　長谷川広司　大倉　寛　菊地更生　荒井辰弥　荒井謙之輔　横山宏太郎　内田昌子　（その他）

（〇・六口）田中栄蔵
応募会員数累計　一〇八六名
応募口数累計　二九四〇・一口
金額累計一四、七〇〇、六六三円

ックとは非常に違う。読むガイドブックと言うより、寧ろ目で見て楽しむガイドブックと言う方が、ぴったりする程、色あざやかなカラー写真で埋めつくされている。

どんなガイドブックでも、われわれは、先ず表紙の写真で品定めをし、パラパラとめくった中のカラー写真で、今度は内容の充実性をたしかめる。

勿論、この本はそんなきまりきった調べ方をする必要はみじんもない。むしろこのガイドブックは一、二度ネパール・ヒマラヤに登った経験者の思い出に花を咲かせるための美しい本で、いつでも手許において、ドドコシはどっちに流れていたのかな？　などと忘れたところの地図を広げて見る。

地名は日本のカタカナと英文字で記されていて親切であるが、充分に時間をかけた、贅沢な旅のようにも見えるコースが沢山ある。

初心者とか経験者向きなどと、素人臭い書き出しはなく、じっくりと、ヒマラヤのふところに抱かれてみたい人には、またとない参考書である。しかし初心者は色ずり頁の最後の、黒白頁の「ネパールという国」をじっくりと読む必要がある。ネパールでのタブーな事柄をもう少し頁数を割いて書いた方が、日本からのトレッカーに親切かと思う。トレッキングパーミットの代金等も書かれて、仲々細かく気がついているが、ネパールは、いつ、それを値上げするか分からないので、その点も注意するように付け加えてあれば申し分はない。

ネパール語の紹介は綴じ込みにして、すぐ取れるようになっていればネパール行きのポケットに入れることができて便利かと思う。この贅沢な本はリュックサックに入れて背負って行くには余りにも美しく、むしろ書斎の机の上で毎日、朝夕にひもといて、たのしみながら、目で見る山岳聖書的な本として大切に扱う書物のように考えたい。

一九八四年一月十五日　山と渓谷社発行　二六四ページ　定価三九〇〇円

（佐藤テル）

山のかおり

坂戸勝巳著

昨年亡くなられた本会会員坂戸氏の遺稿集である。著者は戦前三田にあった清水書店より「日本山岳文献ノート」を発行したのを皮切りに、日本の山岳図書についての研究で知られていたが、今回遺稿としてまとめられた。主な内容は次の通りである。

第一部、館潔彦について、中山再次郎とその周辺、中野理の情熱金井勝三郎を憶う。第二部、「アルパインレジスター」随想、「山岳文学序説」を読んで、覆刻・山岳名著と二つの解題書、島田巽の新著「山・人・本」をよんで、「日本山岳文献ノート」出版の頃、ほか、第三部、山岳に関する本邦文献（明治・大正期）

第一部は人物研究だが、ことに館測量師についての研究は登山史上からいってもきわめて注目すべきものである。第二部は山岳図書に関し、そのうんちくを傾けたもので読みごたえがあり、第三部は共立社の「山岳講座」第二巻に発表された詳細な山岳図書の解説である。

本書は生前から発行が計画されていたそうだが、その遺志を継いで日本山書の会の水野勉、上田茂春両氏の手でまとめられた。生前出されていたら、著者はどんなにか喜ばれたことだろうと思う。なお巻頭四枚目の写真が館と金井と入れ違っているので書きそえておく。

昭和五十八年十月三十日　日本山書の会発行　二一八ページ　定価三〇〇〇円

（山崎安治）

図書受入報告

図書委員会

昭和 59 年 5 月分受入図書（つづき）

7. Mario Fantin 著 "Uomini e montagne del Sahara" Tamari Editori 1970（牧野四子吉氏寄贈）
8. Mario Fantin 著 "Sui ghiacciaidell' Africa" Cappelli Editore 1968（牧野四子吉氏寄贈）
9. Réné Ferlet Guy Poulet 著 "Aconcagua; South face" Constable 1956（購入）
10. C. Bonington and C. Clarke "Everest; The unclimbed ridge" Hodder and Stoughton 1983（購入）
11. 中国登山隊編「五星紅旗挿上托杷峰」外文出版社 1979（渡辺兵力氏寄贈）
12. Karl Ziak 著 "Der Mensch und die Berge" DAS Bergland-Buch（水野勉氏寄贈）
13. "Il gran cervino" N. Zanichelli 1964（水野勉氏寄贈）
14. 脇坂順一著「七十歳はまだ青春」山と渓谷社（著者寄贈）
15. 野上素一編「新伊和辞典 増訂版」白水社 1983（購入）
16. 神山弘著「秩父 奥武蔵伝説 たわむれ紀行」金曜堂 1984（発売元岳書房寄贈）
17. 村松山岳会編「撫林 第一集」1983（笠原藤七氏寄贈）
18. 後藤 允著「尾瀬一山小屋三代の記」岩波書店 1984（版元寄贈）

6 月分受入図書

1. "National geographic atlas of the world. 5th ed." National Geographi Society 1981 (Charles McCarry 氏寄贈)
2. 羽賀正太郎他編「日本の名山10—白山・大台と近畿の名山」ぎょうせい 1984（版元寄贈）
3. 多田等観著「チベット滞在記」白水社 1984（版元寄贈）
4. 仙台市役所山岳会創立 50 周年記念事業実行委員会「ヒムルン・ヒマール登山報告書 1983」1984（板橋元一氏寄贈）
5. 根深誠著「新編みちのく源流行」路上社 1984（版元寄贈）
6. 藤江幾太郎著「藤江幾太郎表紙画集」北荘画廊 1984（著者寄贈）
7. 日本山岳会 信濃支部「日本山岳会信濃支部三十五年」1984（版元寄贈）
8. 高松ダウラギリ I 峰登山隊「'82 ダウラギリ I 8,167m」1982（三谷統一郎氏寄贈）
9. 羽賀正太郎他編「日本の名山 11—阿蘇・九重と九州の名山」ぎょうせい 1984（版元寄贈）
10. 東京都立両国高等学校 両峰会・山岳部編「やまきち七号」1983（版元寄贈）
11. 日本山岳会「日本山岳会学生部年報 第7号」1983
12. 東京電力（株）姉崎火力山岳部「団栗 第5号」1983（須貝高善氏寄贈）
13. 蜂谷緑著「尾瀬ハイキング—花・鳥・道—岩波ジュニア新書77」岩波書店 1984（著者寄贈）
14. 青柳健著「山の絆」岳書房 1984（版元寄贈）
15. 村岡謙治著「写真集 ふるさと鳥海山 1」六兵衛館 1983（著者寄贈）
16. 島田巽著「ふだん着の英国」暮しの手帖社 昭30（滝川清氏寄贈）
17. ベルニナ山岳会編 マカルー I 峰登山隊「MAKALU 8,463 m マカルー I 峰登山報告書」1983（編者寄贈）
18. ヘイミシュ・マキニス著 長野きよみ訳「ロストワールドをめざして 南米ロライマ山登攀記」山洋社 1984（版元寄贈）
19. 近藤信行編「日本の山の名著・総解説」自由国民社 1984（版元寄贈）
20. 「高所登山における雪崩事故—シンポジウム記録」日本山岳会 1984（金坂一郎氏寄贈）
21. 水野勉著「登山家素描」鹿鳴荘 1983（著者寄贈）
22. 「日本登山記録大成 全20巻」同朋舎出版 1983（版元寄贈）
23. 小泉共司著「奥利根の山と谷」白山書房 1984（版元寄贈）
24. 中野融著「HIKING in THE ALPS」山と渓谷社（版元寄贈）
25. イザベラ・バード著 高梨健吉訳「日本奥地紀行」平凡社 1982（織田沢美知子氏寄贈）
26. 上野巌著「上野巌 写真集 南アルプス」山梨日日新聞社 1983（版元寄贈）
27. "Peoples and places of the past" National Geographic Society 1983 (Charles McCarry 氏寄贈)
28. Tone Škarja 著 "Everest" Mladinska knjiga 1981（購入）

7 月分受入図書

1. 白鳳会編「白鳳 第5号（創立 50 年記念）」1975（宮下啓三氏寄贈）
2. 橋本太郎著「奥鬼怒山地—明神ヶ岳研究」現代旅行研究所 1984（版元寄贈）
3. 春日俊吉著「山に逝ける人々前編，後編」森林書房 1984（版元寄贈）
4. みなみ・かずお著「8,000m の履歴書」森林書房 1984（版元寄贈）
5. 佐野寧編「わがエベレスト 加藤保男写真集」読売新聞社 1984（版元寄贈）
6. ウオルター・ウエストン著「極東の遊歩場」山と渓谷社 1984（版元寄贈）
7. 田中澄江著「沈黙の山 私の歴史山歩」山と渓谷社 1984（版元寄贈）

（以下次号）

ネパールの改訂山名（1984年）

許可峰	番号	旧山名	旧高度(m)	新高度(m)	新山名
×	1	Cross Peak	6510	6431	Taple Shikhar
○	2	Jannu	7710	7710	Kumbhakarna
×	3	Pyramid Peak	7123	7123	Pathibhara
×	4	Sphinx	6824	6837	Pathibhara Purba
○	5	Tent Peak	7365	7365	Kirat Chuli
×	6	Twins Peak	7350	7350	Gimmigela Chuli
×	7	Wedge Peak	6750 (6850)	6812	Ramthang Chang
×	8	White Wave	6770 (6960)	6797	Anidesh Chuli
×	9	Outlier	7090	7044	Janak Chuli
○	10	Island Peak	6169	6160	Imja Tse
○	11	Mehra	5820	5820	Khongma Tse
×	12	Peak 38	7589	7591	Shartse II
×	13	Peak 43	6769	6767	Kyashar
×	14	Pyramid Peak	6830	6809	Hongku Chuli
×	15	Pig Pherago	6730	6718	Likhu Chuli
○	16	Big White Peak	7083	6979	Loengpo Gang
×	17	Ladies' Peak	約6000	6256	Gumba Chuli
○	18	Madiya Peak	約6800	6799	Bhairab Takura
×	19	Morimoto Peak	6750	?6150	Bhemdang Ri
○	20	Peak 29	7835	7871	Ngadi Chuli
○	21	Annapurna South	7219	7219	Annapurna Dakshin
○	22	Fluted Peak	6501	6501	Singu Chuli
○	23	Fang	7647	7647	Varaha Shikhar
×	24	Gabelhorn	6248	6248	Gandhrva Chuli
○	25	Glacier Dome	7193	7193	Tarke Kang
○	26	Roc Noir	7485	7485	Khangsar Kang
○	27	Tent Peak	5663	5663	Tharpu Chuli
○	28	Hanging Glacier Peak	約6500	6553	Tripura Hiunchuli
○	29	Junction Peak	6139	6139	Shey Shikhar
×	30	Milchberg	約6000	6126	Palta Thumba
×	31	Wedge Peak	6102	6102	Phunphun Chuli

（註）
○印は登山許可峰
×印は未解禁峰

＜巡礼地の新命名＞

	旧地名	新地名
1	Annapurna Sanctuary	Annapurna Deuthali
2	Hidden Valley	Rikha Samba
3	Davis Fall	Patale Chhango

ルーム日誌　八月

8日（水）山研委
13日（月）
←
18日（土）ルーム閉室
27日（月）総務委員会

今月の来室者128名

会員移動

退会
9484 安部 昌
5336 神谷恒吾

支部変更願
8233 乾 好（静岡→関西）

訂正　会報470号所載「中高年者の大雪山スキー縦走」の筆者は佐々保雄となっておりますが、追記が佐々保雄で、本文は松丸秀夫である旨、筆者より申し出がありましたので訂正いたします。（編集）

海外委員会よりお知らせ

『カタカナの山名・地名、山岳用語は、どのくらい正確だろうか』と題しお話しを伺います。

日時　十一月一日(木)午後七時より
場所　ルーム集会室
講師　宮下啓三委員

▽おかしな言葉や表記についての反省とその改善のために今夏スイスを訪れた宮下委員が、写真などを混じえ、参加者が自由に討論できるよう、実例を示しその実態に迫ります。

興味をお持ちの方は、お集まり下さい。

昭和五十九年十月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人 日本山岳会
発行者　佐々保雄
編集代表　岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社 技報堂